

科目区分	専門基礎分野	授業科目	チーム医療論
講師名		実務経験の有無	有
単位数(時間)	1単位(30時間)	開講年次	2年次
<p>目的: チームで協働するためのスキルを理解し、看護に必要な多職種との連携・協働の基礎的能力を養う。</p> <p>目標: 1 他者と協働し、チームを効果的に機能させる視点及びスキルを理解できる。 2 関係職種間での連携及び協働により、地域社会の人々の保健・医療・福祉に貢献できる態度を養う。</p>			
授業計画			
単元	時間	内容	
1 協働:他者とともに活動する	15	1 協働するための視点とスキル 1) チームとは 2) チームの構成要素 3) チームの機能 4) チームワーク 2 リーダーシップ 1) リーダーシップとは 2) リーダーシップの理論 3) リーダーと信頼 3 フォロワーシップ 4 チームの一員に求められる協働 1) 協働するためのコミュニケーション、マナー、姿勢 2) 承認するスキル 3) アサーション 4) 交渉とコンサルテーション 5 継続看護のための協働 1) 継続看護とは 2) 退院支援調整 3) 看護職間の協働 4) 多職種との協働	
2 多職種との連携・協働	8	1 施設内の専門職と考える多職種連携 1) 医師の職責と役割、多職種との連携 2) 薬剤師の職責と役割、多職種との連携 3) 栄養士の職責と役割、多職種との連携 4) 看護師の役割、多職種との連携 (院内での役割及び在宅へつなぐ役割を含む) 2 院内での多職種との連携・協働を考える※1 1) 目標達成のために必要な職種と それぞれの役割 2) 目標設定と共有 3) 各職種へ看護師のはたらきかけ 4) 連携・協働で大切にしたいこと	
	6	3 病院から在宅へ 継続看護のための連携、協働 1) MSWの役割と機能、法的責任 2) 退院支援看護師の役割と機能、法的責任 4 病院から在宅へ多職種の役割と連携・協働を考える ※2 1) 目標達成のために必要な職種と それぞれの役割 2) 目標設定と共有 3) 目標達成に向けた 看護師のはたらきかけ 4) 連携・協働で大切にしたいこと	

評価方法	レポート、ロールプレイ、参加状況・態度等
テキスト	メディカ出版 看護の統合と実践① 看護管理 医学書院 地域・在宅看護論[1] 地域・在宅看護の基盤
参考資料	医歯薬出版 チーム医療論
履修上の 留意事項	予習・復習をして授業に臨むこと。 演習やグループワークは積極的な参加姿勢で臨むこと。 提出物は、提出日時を厳守すること。
備考	※1※2は事例検討 単元2 多職種との連携・協働の実際には、事例について学生が連携・協働について検討し、発表、講師から助言を頂く。

科目区分	専門分野	授業科目	地域・在宅看護論援助論Ⅳ
講師名		実務経験の有無	有
単位数(時間)	1単位(30時間)	開講年次	2年次
目的:看護の介入時期と看護の継続性について学び、在宅看護における対象別看護の特徴を理解する。 目標: 1 在宅看護介入の目的と方法特徴について理解できる。 2 対象別看護の特徴と支援方法について理解できる。 3 訪問看護における看護過程の特徴が理解できる。			
授業計画			
単元	時間	内容	
1 地域・在宅における時期別の看護	10	1 病状経過の時期別に応じた看護と継続性 1) 健康な時期 2) 外来受診期 3) 入院時 4) 在宅療養準備期 5) 在宅療養移行期 6) 在宅療養安定期 7) 急性増悪期 8) 終末期(グリーフケアを含む)	
2 対象に応じた在宅看護(事例)	8	1 医療的ケア児への看護 2 精神疾患の療養者への看護 3 難病(ALS)を持つ療養者への看護 4 独居の療養者への看護	
3 訪問看護を利用する対象者の看護過程	11	1 訪問看護の看護過程の展開 ※1 1) 看護過程展開の特徴 2) ICF の概念 3) 訪問看護利用者の全体像の把握と臨床判断能力	
	1	試験	
評価方法	筆記試験、レポート		
テキスト	医学書院 地域・在宅看護論〔2〕 地域・在宅看護の実践		
参考資料	医学書院 地域・在宅看護論〔1〕 地域・在宅看護の基盤 インターメディカ 写真でわかる訪問看護アドバンス 必要に応じて適宜紹介する。		
履修上の留意事項	予習・復習をして授業に臨むこと。 提出物は提出日時を厳守すること。		
備考	※1 は演習を行う。 単元3 訪問看護の看護過程の展開では、実際に訪問する場面でのコミュニケーションや援助を通して、訪問看護における臨床判断能力や意図的な観察の必要性が理解できるよう、グループに分かれてロールプレイを行う。		

科目区分	専門分野	授業科目	成人・老年看護学援助論Ⅰ
講師名		実務経験の有無	有
単位数(時間)	1単位(30時間)	開講年次	2年次
目的: 成人・老年期にある対象への健康状態の経過に応じた看護が実践できる基礎的能力を養う。 目標: 1 急性期・周手術期の看護を理解できる。 2 回復期の看護を理解できる 3 慢性期の看護を理解できる。 4 終末期の看護を理解できる。			
授業計画			
単元	時間	内容	
1 成人・老年期にある対象の急性期・周手術期の看護	9	1 急性期の看護 1) 急性期の特徴 (1) 急性期の経過と治療の特徴 (2) 治療環境に対する反応 (3) 急性期にある患者及び家族の特徴 2) 急性期にある成人・老年期の対象への看護 (1) 急性期における生命の維持、安全な治療実施への看護 (2) 急性期にある患者の心理と援助 (3) 急性期にある患者の家族の心理と援助 (4) 急性期看護の倫理的側面 2 周手術期の看護 1) 周手術期の特徴 (1) 手術療法による侵襲と生体への反応 (2) 周手術期における看護師の役割 (3) 周手術期における安全管理 2) 周手術期にある成人・老年期の対象への看護 (1) 手術前の看護 (2) 手術中の看護 (3) 手術後の看護 (4) 術後合併症と予防	
2 成人・老年期にある対象の回復期の看護	4	1 回復期の看護 1) 回復期の特徴 (1) リハビリテーション医療の特徴 (2) リハビリテーションを受ける患者の特徴 (3) 障害受容と適応 2) 回復期にある成人・老年期の対象への看護 (1) 障害受容プロセスに応じた援助 (2) 生活の再構築に向けた援助 (3) チームアプローチと社会資源の活用 (4) 地域生活への移行支援	
3 成人・老年期にある対象の慢性期の看護	8	1 慢性期の看護 1) 慢性期の特徴 (1) 慢性期の経過と治療の特徴 (2) 慢性期にある患者及び家族の特徴 2) 慢性期にある成人・老年期の対象への看護 (1) 慢性期の患者のニーズ (2) セルフケア・セルフマネジメントに向けた支援 (3) 行動変容に向けた支援 (4) 療養生活を支える社会資源の活用 (5) 家族介護者への支援	

4 終末期の看護	8	<p>1 終末期看護(エンドオブライフケア)</p> <p>1) 終末期の特徴</p> <p>(1) 終末期にある患者及び家族の特徴</p> <p>(2) 死生観と死への準備</p> <p>(3) 終末期の経過と治療の特徴</p> <p>2) 終末期看護(エンドオブライフケア)</p> <p>(1) 意志決定への支援</p> <p>3) 看取りの実際</p> <p>(1) 身体的変化とアセスメント</p> <p>(2) 苦痛を緩和するケア</p> <p>(3) 死後の処置</p> <p>(4) 家族への支援</p> <p>4) グリーフケア</p>
	1	試験
評価方法		筆記試験
テキスト		<p>医学書院 別巻 臨床外科総論</p> <p>メヂカルフレンド社 リハビリテーション看護</p> <p>ヌーヴェルヒロカワ 慢性期看護論</p> <p>医学書院 基礎看護学[4] 臨床看護総論</p>
参考資料		<p>必要に応じて提示する。</p> <p>医学書院 臨床外科看護総論</p> <p>医学書院 老年看護学</p> <p>南江堂 成人看護学急性期看護 I</p>
履修上の留意事項		科目を履修するにあたり、予習・復習をして授業に臨むこと。
備考		

科目区分	専門分野	授業科目	成人・老年看護学援助論Ⅲ
講師名		実務経験の有無	有
単位数(時間)	1単位(30 時間)	開講年次	2年次
目的: 機能障害のある成人・老年期の対象への看護を実践できる基礎的能力を養う。 目標: 1 消化吸収・排泄機能に障害のある患者の看護が理解できる。 2 栄養代謝機能障害のある患者の看護が理解できる。 3 手術を受ける患者の看護が理解できる。			
授業計画			
単元	時間	内容	
1 消化吸収・排泄機能に障害のある患者の看護	12	1 消化吸収・排泄機能障害のある患者の特性 1) 患者心理 2) 身体傾向 3) 起こりやすい問題と生活への影響(咀嚼・嚥下障害、消化管機能障害) 2 消化・吸収機能障害に応じた看護 1) 口腔・咽頭腫瘍(舌癌、咽頭癌、喉頭癌) (1) 咽頭・喉頭摘出術 2) 上部消化管腫瘍(食道癌、胃癌) (1) 食道切除術、胃切除術 3) 下部消化管腫瘍(大腸癌、結腸癌) ※1 (1) 大腸切除術 (2) 人工肛門造設 4) 炎症性疾患(潰瘍性大腸炎・Crohn<クローン>病) 5) 潰瘍性疾患(胃・十二指腸潰瘍)	
2 栄養代謝機能障害のある患者の看護	6	1 栄養代謝機能障害のある患者の特性 1) 患者心理 2) 身体傾向 3) 起こりやすい問題と生活への影響 (肝機能障害、膵液分泌障害、胆汁分泌障害、代謝機能障害) 2 栄養代謝機能障害に応じた看護 1) 肝炎・肝硬変 (1) 肝庇護療法 (2) 食道静脈瘤内視鏡治療 2) 肝癌 (1) 肝生検 (2) 肝動脈塞栓術 (3) 肝切除術 3) 膵炎・膵臓がん (1) 膵切除術 4) 胆石症 (1) 胆道・胆のうドレナージ (2) 腹腔鏡視下手術 5) 高尿酸血症、脂質異常症、肥満	
3 手術を受ける患者の看護過程	11	1 消化器疾患患者の看護過程の展開 1) 消化器疾患患者事例を用いた看護過程の展開 2) 事例を用いた術後患者の離床支援 ※1	
	1	試験	

評価方法	筆記試験、レポート等
テキスト	医学書院 成人看護学(5) 消化器
参考資料	<p>メディックメディア 看護がみえるvol.4 看護過程の展開 メディックメディア 看護がみえるvol.5 対象の理解 I 学研 看護過程に沿った対症看護(病態生理と看護のポイント) 学研 疾患別看護過程の展開 照林社 基準看護計画 臨床で良く出合う看護診断と潜在的合併症 医学書院 臨床外科看護総論 医学書院 老年看護学 医学書院 老年看護 病態・疾患論 医学書院 基礎看護学(3) 基礎看護技術II その他、必要に応じて適宜紹介する。</p>
履修上の 留意事項	<p>科目を履修するにあたり、解剖生理学、疾病治療論Ⅱの消化器を十分復習して臨むこと。 予習・復習をして授業に臨むこと。 レポート課題や演習は積極的な参加姿勢で臨むこと。 提出物は提出日時を厳守すること。</p>
備考	※1は演習を行う。

科目区分	専門分野	授業科目	小児看護学援助論 I
講師名		実務経験の有無	有
単位数(時間)	1単位(15時間)	開講年次	2年次
<p>目的: 子どもの健康の保持・増進、成長・発達を促すための基礎的知識と技術を習得する。</p> <p>目標: 1 子どもの成長・発達に応じた日常生活援助の方法を理解し、基本技術ができる。</p> <p>2 子どものアセスメントに必要な技術を理解し、基本技術ができる。</p> <p>3 子どもの診療に伴う看護技術および発達段階に応じた援助方法が理解できる。</p>			
授業計画			
単元	時間	内容	
1 子どもの日常生活援助	4	1 子どもの日常生活援助の基本 1) 発達段階に即したセルフケアの支援 2 小児各期の日常生活援助技術 1) 乳児期 (1) 調乳方法と授乳の仕方 ※1 (2) おむつの種類・着脱方法 ※1 2) 幼児期 (1) トイレトレーニング (2) 衣類の着脱の仕方 3) 学童期・思春期・青年期 (1) 学習支援 (2) 健康教育	
2 子どものヘルスアセスメント	4	1 アセスメントに必要な技術 1) コミュニケーション 2) 観察に必要な技術 3) バイタルサイン測定 ※ 4) 身体測定 2 身体的アセスメント (1) 観察の基本技法(問診・視診・聴診・触診) (2) 呼吸のアセスメント (3) 循環器系のアセスメント (4) 腹部のアセスメント (5) 筋・骨格系のアセスメント	
3 子どもの診療に伴う看護技術	6	1 検査・処置を受ける子ども 1) 子どもにとっての検査・処置 2) 発達段階に応じたプリパレーション 2 検査・処置に伴う看護の実際 1) 与薬 (1) 薬剤の形状・年齢に応じた与え方 (2) 注射 (3) 持続輸液管理法(固定・滴数調整) 2) 検体採取と援助 (1) 採血 (2) 採尿、便採取 (3) 骨髄穿刺 ※2 (4) 腰椎穿刺 ※2 3) 抑制 4) 酸素療法 ※2 5) 吸入療法(排痰、吸引も含む)	

	1	試験
評価方法		筆記試験、参加状況・態度等
テキスト		医学書院 小児看護学[1] 小児看護学概論・小児臨床看護総論 インターメディカ 写真でわかる小児看護技術アドバンス
参考資料		医学書院 小児看護学[2] 小児臨床看護各論 必要に応じて適宜紹介する。
履修上の 留意事項		予習・復習をして授業に臨むこと。 積極的に参加し、技術習得に努めること。
備考		※1は演習を行う。 ※2は演示

科目区分	専門分野	授業科目	看護研究
講師名		実務経験の有無	有
単位数(時間)	1単位 (30時間)	開講年次	3年次
目的： 研究の意義や概念を理解し、研究成果を看護実践に活用できる能力を習得する。 目標： 1 看護研究の意義と研究過程の概要を理解できる。 2 ケーススタディの意義と方法を理解できる。			
授業計画			
単元	時間	内 容	
1 研究の意義と過程	14	1 研究の目的 2 研究の成果 3 研究の種類と方法 1) 質的研究 2) 量的研究 4 研究過程 1) 研究課題の明確化 2) 文献検索と文献検討 (1) 意義と種類 (2) 方法 ※1 (3) 読み方 (クリティーク) ※1 (4) 引用方法と記述 3) 概念枠組みの設定 4) 仮説の設定 5 研究計画書 6 論文の一般的な構成と留意点 7 研究における倫理的配慮 1) 遵守すべき倫理原則と擁護すべき権利 2) 研究倫理に関するガイドライン 8 研究発表 1) 研究成果を発表することの意義 2) 発表の場 3) 発表方法	
2 ケースレポートの意義と方法	15	1 ケースレポートとは 1) ケースレポートの目的および種類 2) 構成要素 2 ケースレポートのすすめかた 1) 看護過程 2) テーマ設定 3) 観察と記録 4) 情報の収集と整理 5) 倫理的配慮 3 ケースレポート作成の実際※2	
	1	試験	
評価方法		筆記試験、レポート等	

テキスト	医学書院 別巻 看護研究
参考資料	
履修上の 留意事項	予習・復習をして授業に臨むこと。 積極的な参加姿勢で臨むこと。 提出物は、提出日時を厳守すること。
備考	※1, 2は演習を行う。